やまと日本かぶれ

第二部・第九回

繊細な造形美・折り紙

写真は花も葉もすべて折り鶴でできた菊の花。折り紙を組み合わせることによってさらに新しい形を生み出すことができる

真の国際化とは自分の国を知ること。
紙を折るだけで芸術作品が出来上がる折り紙。
一枚の紙が新たなコミュニケーションを生む。

text by 渡辺幸裕 + photographs by 稲垣純也

日本人なら誰もが一度は折ったことがある折り鶴。たった一枚の正方形の紙から生み出される繊細な造形は、折り紙を知らない人にとっては衝撃的なものである。

以前、英国で仕事をした際、現地スタッフと懇意になれた大きな要因がまさにこの折り鶴だった。手元にあった紙で何気なく鶴を折ったところ、想像以上に喜ばれ、結局何人ものスタッフに鶴を折ってあげることになった。鶴を手にした彼らの表情は実に明るいものに変化し、心理的な距離も縮まったのである。一枚の紙で折られた鶴が、言葉や習慣、そしてビジネススタイルの違いなどを凌駕してコミュニケーションに大いに役立つこともある。

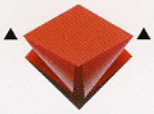
折り紙の歴史にはいまだ解明されていないことが多い。中国で紙が発明されて世界に広まり現在に至るまで、折り紙が受け継がれている国は日本以外にもある。しかし日本の折り紙が世界のどの国よりも発展したのは、和紙があったからと言えるだろう。破れにくい丈夫な和紙は、折り紙の素材に非常に適していた。貴族社会で物を包むために使われていた和紙は、和歌や手紙などの贈り物を装飾するためにも使われるようになり、やがて武家社会において作法の一つとして発展し、様々な折り方が伝承されるようになる。江戸時代に庶民の間に広まって以降、儀礼としての折り紙から遊びとしての折り紙が数多く誕生した。

折り紙には複雑で難しそうに見えるものも多い。しかし今回取材したおりがみ会館館長の小林一夫さんは、「きちんと作ることにこだわらなくてもよい」と言う。取材中にも、話をしながら手元も見ずに次々といろんなものを折ってくれた。「コツは折り目を正しくつけることです」。折り目がきちんとしていれば、少々紙がずれていても美しく見える。キレイに折れないからと敬遠するのではなく、まずは気楽に作ってみよう。

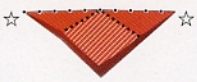
和の小物をビジネスに生かすことで、これまでとはひと味違ったコミュニケーションを取ることができる。折り紙は相手の目の前でパフォーマンスできる、実に素晴らしい和小物である。身近にある紙で、鶴を折ってみてはいかがだろう。

基本の鶴を折ってみよう

右の写真の▲の角が中心にくるように折る。反対側も同じように折る。



右の写真の、☆部分を、……部分が山に—・—部分が谷になるように畳む。斜線部分に折れすじが入らないように気をつけよう。



開いたら、対角線上にある角を合わせるように三角に折る。

開始！

正方形の紙を4つ折りにして折りすじをつける。

☆部分が★部分の2枚の間に入るように、中割り折りにする。

▲の角が中心にくるように折る。反対側も同じように折る。

下にきている角を引き上げ、折りすじ通りに開いて畳む。反対も同様。

……部分にも折りすじをつけて、4つ折りサイズになるところまで開く。

完成！

この折り方で折った鶴は、羽根の部分に折りすじが入りません。羽根にすじの入っているものは凶相とされることもあるので、この折り方をマスターするのがいいでしょう。

片側だけさらに中割り折りにして頭をつける。

反対側も同じように中割り折りにして2枚の間に入れる。

鶴のブックマーク

完成！

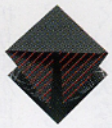
書類を綴じるクリップとしても使える。

左右に飛び出している部分を片方だけ中割り折りにして頭をつける。

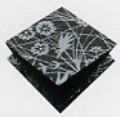
上半分に折り上げた部分を引き下ろし、同様に内側へ折り込む。

最後の部分を、内側に折り込む。

次に出てきた斜線部分を、両方とも中割り折りにする。その際、下が斜めに出るような折り方をするとよい。



一番表の部分を上半分に折り上げる。



開始！

基本の鶴の折り方の3手順目まで一緒。

Yukihiro Watanabe

ビジネス・コーディネーター。1950年生まれ。前職のサントリー宣伝部で、海外イベントを担当した時、自国文化についての知識のなさを痛感。2001年独立を機に日本文化超初心者の会"和・倶楽部"を提唱、運営中。会のコンセプトは「日本人に生まれたことを喜びたい」。

写真：新関雅士

おりがみ会館
Origami Kaikan

小林一夫さん
おりがみ会館館長

1941年生まれ。和紙の老舗「ゆしまの小林」の後継者でもある。

住所：東京都文京区湯島1-7-14
電話：03-3811-4025
営業時間：平日9：00～18：00
http://www.origamikaikan.co.jp/

■お知らせ■

「日本かぶれ」では読者の皆様にご参加いただける様々なイベントを計画しております。伝統文化を体験するセミナーや伝統芸能を鑑賞する催しなど、日本をよりよく知るための機会としてご活用ください。詳細は当コラムと日経ビジネスアソシエオンライン（http://nba.nikkeibp.co.jp/）を通じて順次お知らせいたします。ご期待ください。

参考文献　『おり鶴百彩』小林一夫／MPC　『千代紙で楽しむ大人の折り紙』大島 清／G.B.　『折り紙ZAKKA12か月』正久りか／河出書房新社　『日本のおりがみ事典』山口 真／ナツメ社